転生王子はダラけたい。13

TENSEIOJIHA DARAKETAI

朝比奈 和
Asahina Nagomu

登場人物

CHARACTER

レイ
女性好きで少し残念な、フィルの同級生。

ライラ
商家の娘で、レイの幼なじみ。商魂たくましい。

アリス
フィルの幼なじみ。賢くて機転が利く。

イルフォード
ティリア王立学校高等部の生徒。ちょっと浮世離れした人物。

トーマ
フィルの同級生。マイペースで動物好き。

フィルの仲間たち

コクヨウ

ヒスイ

コハク

テンガ

ザクロ

ルリ

ランドウ

マクベアー先輩
フィルの頼れる先輩。男子生徒たちの憧れの的。

ディーン
ドルガド王立学校高等部の生徒。鍛錬好きで、冷静な性格。

フィル・グレスハート
大学生・一ノ瀬陽翔（いちのせはると）が転生した本編の主人公。目立たずにダラダラ過ごすのが夢。

イヴェル
フィルが出会った、迷子の召喚獣。

カイル・グラバー
クールな美形少年。闇の妖精に好かれる蝙蝠の獣人。

1

ステア王国・ティリア王国・ドルガド王国、三国王立学校対抗戦によって結ばれた友好の絆。

その友好関係を持続させるため、三国王立学校の間で見学会を行うことになった。

他国の文化に触れ、互いの良きところを学び、一緒に向上していこうという取り組みだ。

言わば、三国王立学校の交流会である。

交流会の初年となる今年は、俺――フィル・グレスハートも通うステア王立学校の主催となった。

歓迎会から始まり、メインとなる見学会、最終日の夜の仮装パーティーイベントなど、生徒や教職員皆が協力し、ティリアやドルガドの生徒、学校長たち招待客をおもてなしした。

俺も生徒総長のライオネル・デュラント先輩のお願いで、ライン・マクベアー先輩、友人のカイル・グラバーやシリル・オルコットと一緒に、図書館などの学校施設の案内役を務めることになった。

当日の案内はスムーズにいったけど、それまでの準備が結構大変だったなぁ。

屋台を設置して、学校案内の最後に招待客をおもてなしすることになったからだ。

通常授業をこなしつつ、屋台の飾りつけやメニュー案の検討、食材調達や屋台担当の料理人さんたちの手配もしなきゃいけなかった。
まぁ、皆喜んでくれたから、頑張った甲斐があったなぁとは思うけどね。

そんな三国の王立学校交流会も無事に終わり、招待客たちがそれぞれの学校へと帰る日がやってきた。
中等部寮の前の広場では、ステアで力自慢の生徒も協力して、招待客たちの荷物を荷台に積んでいる。
荷運びで活躍するマクベアー先輩やカイルの姿を、俺は羨ましげに見つめていた。
俺も一応、お手伝いの立候補をしたんだけどなぁ。
速攻で戦力外通告されて、ステアのシーバル・ゼイノス中等部学校長やステアの生徒たちのいる列に並んで、作業が終わるのを待っていた。
……いや、訂正。学校長とステアの生徒と、他校生一人がいる列に並んで……だ。
その他校生とは、ティリア王立学校高等部一年のイルフォード・メイソン。
彼も先ほどまで荷運びをしていたのだが、ふいに考え込んだ様子で列に入ってきたんだよね。
そして、なぜか俺の真後ろに立っている。
「なぁ、なんでステア側の列に入っているんだ？」

友達のレイ・クライスが肘でつつきながら尋ねてくるので、俺は唸る。
「……わからない」
本当にさっぱりわからない。さっきこっそり聞いてみようとしたんだけど、優美な笑顔を返されて何も言えなくなっちゃったんだよね。
まぁ、イルフォードの行動に驚かされるのは、今に始まったことじゃない。
彫刻や刺繍などの芸術面に優れ、ティリアの天才と呼ばれるイルフォード。
浮世離れした雰囲気を持つ彼は、その行動でよく周囲を驚かせる。
対抗戦の時は、俺に似合うからって急にリボンを結んできたことがあったなぁ。
交流会の何日も前に、仮装の衣装制作現場を見たいって単独でステアに来たのにも驚いた。
一応彼なりに、その行動に至る理由はあるみたいなんだけど、口数が少ないからその意図を汲み取るのに時間がかかるんだ。
滞在期間中、一緒に過ごさせてもらって、微妙な表情とか少しわかるようになってきたんだけどなぁ。イルフォードを理解するには、まだ時間がかかりそうだ。
「かくれんぼかなぁ？」
トーマ・ボリスがのほほんと言って小首を傾げると、レイは呆れた顔をする。
「フィルの後ろじゃ、全然隠れられていないだろ」
……それは、隠れられないほど俺が小さいと言いたいのか。

自分を擁護するわけじゃないけど、たとえ隠れられたとしても、イルフォードは見た目が派手だからその他大勢になじめないと思うよ、きっと。
「イルフォード先輩、何やってるんですか」
ほらね、案の定サイードに見つかった。
ティリア王立学校中等部三年のサイード・ウルバンは、先輩のイルフォードと同級生のリン・ハワードのお世話役を担っている人だ。ティリア王立学校の苦労人である。
「荷を積み終わりましたから、ステアの皆さんに挨拶して帰りますよ」
サイードはそう言って、イルフォードに向かってこちらに来るよう手招きをする。
だが、イルフォードはぬいぐるみみたいに俺を後ろから抱え込むと、ふるふると首を横に振った。
「やっぱり……もう少しステアにいたい」
「……は？」
それを聞いたサイードはポカンと口を開け、ゼイノス学校長は「おやおや」と楽しそうに笑う。
「いやいや、何言っているんですか。荷台にイルフォード先輩の荷物も積んでいるんですから、残りたいって言ったってダメですよ」
サイードが首を横に振ると、イルフォードは悲しげに眉を下げた。
「もう少しで完成するところだから」
「完成？　ほう、何か作っているのかね？」

顎髭を触りながら尋ねるゼイノス学校長に、俺は小さく手を挙げた。
「あ、イルフォードさんに小屋の改装を手伝ってもらっているんです。多分それのことかと……」
完成間近なもので、思いつくものといったらそれしかない。
小屋とは寮の裏手にある森の奥に建つ、俺が借りている小屋のことだ。
もともとは寮の管理人さん一家が住んでいた小屋だったのだが、寮の脇に新しく管理人さんの家が建てられたので、空き家になってしまった場所である。
生徒総長のデュラント先輩が、友人のマクベアー先輩に鍛錬用にと貸し、さらにマクベアー先輩が中等部を卒業する際、俺に鍵を譲ってくれた。
高い塀に囲まれた３ＬＤＫの広い庭つき物件で、改装も自由にしていいと言われている。
学業や交流会準備の合間を見ながら、ちょこちょこリフォームしているんだよね。
その小屋を訪れたイルフォードが、リフォームした和室とお風呂に興味を持ち、お手伝いしてくれるようになったのだ。
おかげで完成まであともう少しというところまできている。
「完成したものを見たいんでしょうね」
積み込み作業を終えてやって来たカイルの言葉に、イルフォードは微かに表情を曇らせ頷いた。
少し眉を下げただけなのに、美形ゆえか全身から哀愁を漂わせている。
ずいぶん助けてもらったし、俺だってできれば完成した小屋を見せてあげたい。

でも、完成間近とはいえ一日二日で終わる作業でもない。完成まで滞在となったら、何日かかるかわからなかった。
ティリア王立学校は作品を提出さえすれば、授業の出席が免除されると聞いているけど、それも限度があるだろうなぁ。
なにせイルフォードはそのシステムを使って、他の生徒より早くステア入りしたんだから。いくらイルフォードといえど、これ以上は日数を延ばせないだろう。
う～ん。どうしたものか。
すると、俺同様に考え込んでいたゼイノス学校長が、長い顎髭を触りながら「ふぅむ」と唸った。
「このまま滞在し続けるというのは難しいじゃろうが……。交流会の準備において助けてもらった恩もあるし、イルフォード君の物作りに対する情熱はよく理解しておる。ここは一度帰り、フィル君が完成させたら改めてステアに来るのはどうじゃ？　休息日を使えば、問題なかろう。ん？」
いたずらっぽく笑うゼイノス学校長の提案に、俺は笑顔で頷いた。
「そうですね。完成したらお知らせします！　また、遊びに来てください」
俺がそう言うと、イルフォードは少し残念そうだったが小さく頷く。サイードはそれを見て、ホ～ッと長い息を吐いた。
「良かったぁ。このままイルフォード先輩が、ステアに残ることになるかと思った」
「えぇ！　イル先輩、ステアに残るの!?」

作業を終えたリンが、驚いた様子で会話に入ってくる。
サイードは額に手をあてると、ジロッとリンを睨んだ。
「お願いだから話を蒸し返すなよ。イルフォード先輩は帰国するの！」
「なぁんだ。ディーンさんが残るって言うから、イル先輩もそうかと思ったのに」
リンは肩を落として、がっかりする。
ディーン・オルコットはドルガド王立学校の生徒で、俺の同級生のシリルのお兄さんだ。
「ディーンさんはドルガドに帰国しないで、ステアに残るんですか？　シリル知ってた？」
俺は目を瞬かせ、シリルに尋ねる。
「う、うん。でも、僕も昨夜聞かされたばかりだよ」
デュラント先輩はクスッと笑って、事情を説明してくれた。
「実は共同研究で、調査が必要なことがあってね。急遽このままステアに残り、探索を手伝ってもらうことになったんだよ」
共同研究とはステア王立学校とドルガド王立学校の間で行われている、タネル草とマリ茸の研究のことだ。
対抗戦で使用したドルガドの遺跡から発見されたそのタネル草とマリ茸は、食べれば疲労回復の効果があると言われている。
研究メンバーのほとんどは、各王立学校を卒業した植物学の研究者たちなのだが、中等部や高等

部の優秀な生徒も数人含まれている。デュラント先輩はその中の一人だった。
「ちなみに俺も、その調査とやらを頼まれているんだぞ」
マクベアー先輩がやって来て、力強く自分の胸を叩いた。
へぇ、マクベアー先輩とディーンの二人が調査を頼まれているってことは、剣の腕前が必要な場所なのかな。二人とも若手の剣士の中で、相当強いもんね。
「いいよなぁぁぁ。俺もできるなら、まだステアに残りたい」
ため息交じりに言うのは、ドルガド王立学校のマッテオ・ボーグだ。ディーンとルディ・アンの友人で、彼ら三人はいつも一緒に行動している。
いかつい顔の彼だが、今はわかりやすいくらいに情けない表情をしていた。
「調査なら俺だって喜んでやるのに、なんでディーンだけなんだよ」
不服そうなマッテオに、ディーンは冷静に返す。
「マッテオが座学の授業を休んだら、単位が心配だからだろう」
「俺だって大丈夫だよ！」
小さな子供みたいに頬を膨らませると、それを見て生徒たちは笑った。
マッテオは喜怒哀楽がはっきりしているし、体や声が大きいので、人によっては威圧的に映るかもしれないが、その裏表がない性格は場を和ませる。
「あぁ、あと数日でいいからステアに残りてぇなぁ」

嘆くマッテオの言葉に、彼の後輩のミカ・ベルジャンが言う。
「マッテオ先輩の気持ちわかります。ステアに来て、隣国なのにこれほど文化の違いがあるのかと驚きましたからね。できれば僕も、ステアに残ってもう少し学びたかったです」
すると、ルディがそれを聞いて、くすくすと笑い出した。
「多分、ミカとマッテオの目的は違うわよ」
「え？　違うんですか？」
キョトンとするミカに、ルディは笑いを堪えつつ頷く。
「マッテオが残りたいのは勉強のためじゃなくて、ステアで食べられる美味しいもの目当てに決まっているもの。そうでしょ？」
ニヤリと笑って、マッテオに視線を向ける。
「わかってるなら言うなよ」
マッテオはちょっとバツの悪そうな顔をした。そんな彼に向かって、リンが何度も頷く。
「いや、わかります、わかります。ステアには他では食べられないような、美味しいものがいっぱいですもんねぇ。フィル君が考案した天国のようなお菓子たちと、もうお別れしなきゃいけないなんて……。あぁ、まだまだ食べたかったなぁ」
お菓子の想像でもしたのか、目を閉じたリンはゴキュッと喉を鳴らした。そんな彼女を、サイードが呆れきった様子で見つめる。

「お土産にたくさん買っただろうが。荷台に載りきらないんじゃないかと心配したんだぞ」
サイードの言うように、ティリアの台車の荷台は、とても高く積みあがっていた。
そうか、あれにはお土産がたくさん載っているのか。荷物を積んでいる様子を見ながら、ステア入りした時よりずいぶん荷物が多いなって思っていたんだよね。
「これでも我慢したんだよ。できればもっと積みたかった！」
訴えるリンの言葉に、ルディが噴き出す。
「あはは、そっちもたくさん買ったのね。こっちもそうなの。ディーンの荷物が載っていない分、こっちのほうが多いかもしれないわ」
ドルガドの荷台もいっぱいだ。なぜかそれを悔しそうに見上げたリンは、サイードを振り返った。
「サイちゃん！　やっぱりもう少し買って帰ろう！」
「だから、もう無理だって言ってるだろ！」
「あと少し！　頑張れば、あと少し載せられると思う！」
「買っている時間もないし、無理！」
「買いたい、買いたい！」
「ダメだってば！」
……スーパーマーケットでお菓子をねだる子供と、その親みたい。
イルフォードといい、リンといい、サイードは苦労するなぁ。

すると、ティリアのマリータ・リゲネ中等部学校長が、そんな二人に向かってパンパンと手を叩いた。
「言い合いは、その辺でおやめなさい。荷物も積み終わったのですから、ステアの皆さんに挨拶をして仲間たちの待つ学び舎に帰りますよ」
艶やかな微笑みで言っているが、目の奥は笑っていなかった。
マリータ学校長に注意をされて、サイードとリンはビシッと姿勢を正す。
「すみません！」
「はい、わかりました！」
ドルガドのゾイド・ブルーノ中等部学校長も、ドルガドとティリアの生徒たちを見回す。
「では、ドルガドとティリアの皆、各学校で一列に並んでください」
その号令に、ティリアとドルガドの生徒が返事をして、自分たちの台車の前に並ぶ。
ブルーノ学校長は生徒たちが並び終えたのを確認すると、ステアの生徒たちを振り返った。
「改めまして。ステアの皆さん、数日間お世話になりました。ステアの授業内容や教育方法は、大変勉強になりました。生徒たちにとって、とても良い機会だったと思います。今回の見学会で学んだ多くのことを、ドルガドに帰ったら教師たちに話し、皆で共有したいと思います」
「私もティリアの学校に戻りましたら、先生方や生徒たちに交流会であったことを話したいと思いますわ。大変刺激的な出来事ばかりでしたから、話しても信じてもらうのに時間がかかるかもしれ

ませんけれど」
続いて言ったマリータ学校長は、口元に手を当ててくすくすと笑う。
「確かに。フィル君の光り輝く衣装とか、実際見ないと信じてもらえなそうですよね」
サイードがチラッと俺を見て言うと、ミカも小さく笑う。
「特にうちの生徒たちは、フィル君がディーン先輩に勝ったって言っても絶対に信じないでしょうね」
「確かに信じられないだろうなぁ」
マッテオたちドルガド生が、肩を揺らして笑う。
「それを言ったら、雪みたいに口の中ですぐ溶ける綿あめとか、バングの実が美味しい食べ物になることとか、食べたことない人はきっと信じてくれないよ」
至極真面目な顔で言うリンに、ドルガドとティリアの生徒たちが大きく頷いた。
ゼイノス学校長は長い顎髭を触りながら、「ふぉっふぉっふぉ」と笑う。
「ステア滞在を楽しんでくれたようで、我々も大変嬉しく思っておりますよ」
「来年は我がティリア王立学校が、開催いたします。心を込めておもてなしいたしますから、楽しみにしていてくださいね」
マリータ学校長は胸に手を当て、俺たちステアの生徒たちに向かって微笑む。
ティリアは個性的な校風だから、きっと楽しいだろうな。

王立学校は王都にあるから、カラフルに彩られているという噂の街も見てみたい。
まぁ、まずはそのために、その見学メンバーに入らないといけないんだけどね。
今回は初年ということで、前回の対抗戦メンバーが招待客として選ばれたけれど、次回も同じとは限らないからなぁ。
「では、皆さんお世話になりました！」
最後に全員で声を揃えて挨拶し、ティリアとドルガドの生徒たちは重い台車を押しながら移動を始める。
そして、時々何度も振り返っては、名残惜しそうにこちらに手を振る。
「皆さんお元気で！」
「また来てください！」
俺たちは口々に言って、その姿が見えなくなるまで手を振り返していた。

2

三国王立学校の交流会が終わり、ステアにいつもの日常が戻ってきた。
何かと忙しかったからなぁ。しばらく、ゴロゴロのんびりしたい。

コクヨウたちにも我慢をさせていた分、たくさんご褒美あげなくちゃ。
留守番をさせることが多かったから、まずは学校の外に遊びに連れていってあげようかなと思っている。
今候補に挙がっている行き先は二つ。ハニーベアのいる森と、北の森の湖だ。
両方行くなら、文句も出ないだろう。そう思っていたのだが……。
【やだやだぁ。先にハニーベアのところに行きたい！】
ただ今、中等部学生寮の裏手の森にある小屋に来ている。例のリフォーム中の小屋だ。
その庭の芝生に転がり、ランドウは足をバタつかせていた。ダンデラオーという神の末裔だけど、今の姿はとてもそうは見えない。
まさか、先にどちらへ行くかでもめると思わなかったなぁ。
駄々をこねているランドウを見て、俺は苦笑する。
ひっくり返って懸命に足を動かしている姿は、起き上がれなくてジタバタしているようにも見えて、申し訳ないがなんだか可愛い。
俺はひっくり返っているランドウを起こし、頭や背中についた細かい葉を払ってあげた。
「ちゃんとハニーベアのところにも行くんだよ。ランドウも湖へのピクニックに行きたいでしょう？」
【……だって、早くはちみつ食べたいし、ハニーベアと遊びたいし、はちみつ食べたい】

はちみつ食べたいって、二回言ったな……。
拗ねるランドウに、カイルはため息を吐いた。
「ハニーベアのところは、ポップコーンの時にも行っただろう」
【そうっす！　今回は湖組に譲ってほしいっす！】
袋鼠のテンガはぴょんぴょんと跳ねて言い、氷亀のザクロが大きく頷く。
【湖組はオイラにテンガにホタル、コハクにルリにヒスイ姉さん。六票も入っているんだぜぃ】
ランドウは悔しそうに【くぅっ！】と唸り、地団太を踏む。
【なんで、ハニーベア組はコクヨウと俺だけなんだぁ！】
ランドウは真面目に言っているんだろうけど、ハニーベア組……幼稚園の組の名前みたい。
すると、コクヨウがハンモックから地面に降り、ザクロたちに向かって言った。
【一票ずつと言うのが気に食わん。我はディアロスなのだから、我だけで十票分に相当するのではないか？】
キリッと真面目な顔で、何言ってるんだろう。
偉い人の特別票みたいなのは聞いたことあるけどさ。
この少人数でそんなこと言い出したら、多数決やる意味ないじゃん。
【そっか！　そうしたら、俺たちのほうが勝ちだ！】
大喜びするランドウに、当然のことながらテンガや、精霊のヒスイから異議が申し立てられた。

【アニキといえど、それはないっす！　ずるいっす！】
【そうですわ。その理屈が通るなら、精霊の私もたくさんの票を持てるはずですもの】
だよね。いくらなんでもそのコクヨウの提案は、許可できない。
とはいっても、この二匹はこのまま引き下がるタイプでもないしなぁ。
腕組みして考え込んだ俺は、ふと閃いてポンと手を打った。
「あ！　じゃあ、湖のピクニックの時に、マームはちみつとバターをたっぷり塗ったサンドウィッチを作るよ。それでどう？」
食いしん坊二匹の目的は、ハニーベアのマームはちみつである。
それならば、ピクニックにもマームはちみつという特別をプラスしてあげたらどうだろうか。
ストックのマームはちみつは少なくなってしまうが、この際しょうがない。
俺の提案に、ランドウの目が輝いた。だがハッとして、喜びを隠すかのように顔をそむける。
【そ、それなら我慢してやってもいいぞ！】
生意気な口調だったが、尻尾は嬉しそうに揺れていた。
「コクヨウもいい？」
俺が尋ねると、コクヨウは「フン」と鼻息を吐く。
【我だけがごねていても、仕方ないからな。今回は譲ってやろう】
「ありがとう。じゃあ、今週はピクニックね」

俺が微笑むと、テンガが【やったっす！】と喜び、事の成り行きを見守っていた毛玉猫のホタルとウォルガーのルリが安堵した。
【喧嘩にならなくて良かったです】
【うん、ホッとしました】
カイルが俺の耳元でそっと囁く。
「納得してもらえて良かったですね。さすがフィル様です。少し甘すぎる気もしますが……」
それは、充分自覚している。
「まぁ、今回は皆へのご褒美だからね」
俺は笑って、腰に手を当て皆を見回す。
「さて、行き先も決まったし、そろそろ寮に戻ろうか……って、あれ？」
庭にいるメンバーの中に、光鶏のコハクの姿がないことに気がついた。
「コハクはどこだろ？」
「いませんね」
カイルもあたりを見回し、ヒスイが首を傾げる。
【さっきまでランドウの真似をして転がっていましたのに……】
コハクは時々、物陰や隅っこでお昼寝していることがあるんだよなぁ。
どこかで眠っちゃっているのかな。

「コハク～、どこにいるの？」
俺たちは名前を呼びながら、花壇やテーブルや椅子の陰を覗き込む。
すると、思っても見ない方向から、コハクの声が聞こえた。
【フィ～ル～！】
庭の端にある鍛錬場の奥の木陰からコハクが飛び出し、俺たちのほうへ向かって走ってくる。
俺が両手のひらを地面に近づけてスタンバイすると、コハクはそこへ勢いよく飛び込んだ。
俺はそのままコハクをすくい上げ、胸ポケットに入れる。
「どこに行ってたの？　コハクは小さいんだから、あんまり遠くに行っちゃダメだよ」
だが、その注意も聞こえていないのか、コハクは興奮気味にペシペシと羽根で俺の胸元を叩く。
【フィル、あっち！　あっち！】
鼻息荒く、自分が来た方向を指し示す。
小さなコハクは視界も低く、時々他の皆が見落とすようなものを発見することがある。
今回も何か見つけたんだろうか。
俺は小さく笑って、コハクに尋ねる。
「あっちに何があったの？」
【まいご！】
元気よく言ったコハクに、俺は目を瞬かせた。

「は？　……迷子？　迷子がいるの？」
コハクはコックリと頷いて、再びピッと来た方向を示した。
「生徒でしょうか？　小屋のあるこの森は、道がわかりにくくなっていますから」
眉を顰めるカイルに、俺は低く唸る。
「でも、コハクが発見したなら、小屋の敷地内で発見したってことでしょ。敷地に入ってきたら、さすがにコクヨウが気づくよね？」
俺が顔を向けて聞くと、コクヨウは【そうだな】と言って頷く。
小屋の周囲を囲むここの塀は高さがあり、全面を蔦がびっしり覆っている。
登ればガサガサ音がするから、コクヨウやカイルがその音に気づかないはずはない。
【今も人の気配はない。もしかすると……気配の小さい小動物かもしれん】
なるほど。動物か。森には野生の小動物も棲息しているから、可能性はある。
まぁ、この辺に棲息している動物が、迷子になるというのも少し考えにくいけど。
「ともかく、どんな子にしろ、困っているなら助けてあげないといけないね」
そう言って、皆でコハクの案内するほうへと歩いていく。
場所はコハクが出てきた木陰からさらに奥、周囲を囲う板塀のあたりだった。
迷子はすぐに見つかった。
うわぁぁ、可愛い。白色の体毛の、小さな子猫？

一瞬そう思ったが、柄を見て間違いだと気づく。
「あの子、雪豹だ。このあたりじゃ珍しいなぁ」
雪がたくさん降る、寒い国に棲息している動物だ。
「ということは、野生ではなく誰かの召喚獣でしょうかね」
「そうかもしれないね」
雪豹は敷地の内側の塀の前で、「ミュウミュウ」鳴きながらあっちへ行きこっちへ行きしている。
板塀の一部に小さな隙間があるから、多分そこをくぐったんだな。
【あっちかな。こっちかな】
雪豹は動揺しているのか、キョロキョロしているのにまったく俺たちに気がついていない。
【さっきのヒヨコさん、どこ行ったんだろう……】
そう言って、しょんぼりと俯く。
【コハク、ここいる！】
雪豹の呟きを聞き、コハクが俺の胸ポケットから、トウ！　とばかりに飛び出した。
「え、ちょっ！　コハク⁉　危な……！」
無鉄砲な！　そんな小さな羽根じゃ飛べないのに！
俺とカイルが慌てて落下するコハクをキャッチしようとしたが、あと少しのところで掴みそこなった。地面にぶつかると思った瞬間、風が吹いてコハクの体が浮き、ふわりと地面に落ちる。

【もうコハクったら、一直線で困りますわね】
風を纏ったヒスイが、ふぅと息を吐く。
び、びっくりしたぁ。ヒスイが風でサポートしてくれなかったら、どうなっていたことか。
「ヒスイ、ありがと」
俺とカイルはぐったりとして、しゃがみ込む。
一方コハクは、こちらの焦りなど知らぬ顔で、そのまま雪豹の元へと駆けていった。
【コハク、来た！】
【ヒヨコさん……】
雪豹はまずコハクを見て、それから俺たちに目を向ける。
「こんにちは。フィルだよ」
雪豹に向かって、俺は優しく微笑む。
「安心して。そこにいるコハクと、召喚獣契約をしているんだ。君は召喚獣？　ご主人さまとはぐれちゃったのかな？　もしよかったらお手伝いするよ」
【おてつ……だい？】
おずおずと尋ねる雪豹に、ホタルとザクロが話しかける。
【フィルさまがご主人さまを見つけてくれるお手伝いしてくれるです！】
【だから、安心しな！】

【ご主人さまのところに？　ほんと!?】
尻尾を振って一瞬喜んだ雪豹だったが、俺の後ろにいたコクヨウを見て耳をぺしょっとたたむ。
【ほ、ほんとに、ご主人さまのところ？】
……疑われてる。
ディアロスであるコクヨウの強大な気は、子狼姿でも変わることはない。
普段からその気を抑えてもらっているのだが、小さい子にはそれでも怖いようだ。
ぷるぷると震える雪豹に、コクヨウはフンと鼻息を吐く。
【案ずるな。フィルのせいで、最近の我は美味いものしか受けつけぬ舌になっておる】
その言い方ってどうなんだ。
そう思ったが、意外にも雪豹は安心したようだ。
【じゃあ、ほんとに連れてってくれる？】
そう言って、一歩前に出てきた雪豹に、俺はにっこりと微笑んだ。
「うん。きっと見つけてあげるよ」

さて、ご主人さまを見つけてあげるには、まずこの子から話を聞かないと。
雪豹を召喚獣にしている生徒に心当たりはないが、俺たちが知らないだけの可能性もある。
早く会わせてあげられたらいいんだけど……。

そんなことを思いつつ、俺は雪豹に目線を近づけ優しく尋ねる。
「君のお名前と、ご主人さまのお名前を教えてくれる？」
【ボクのお名前は、イヴェル。えっと、ご主人さまのお名前はね。ご主人さま……えっと、ご主人さまは……】
言いながら空を見上げたイヴェルは、その状態のまま固まった。
【どうしたんでぇ】
【動かなくなったな】
ザクロは首を傾げ、ランドウはイヴェルの目の前で前足を左右に振った。
「イヴェル、どうしたの？」
俺が声をかけると、イヴェルは悲しげな顔でこちらを見て、再びぺしょっと耳をたたんだ。
【ボク……いつもご主人さまって呼んでるから……お名前……わ、わすれちゃった】
【えーーーーっ！】
【忘れちゃったです!?】
【それは大変っす！】
コハクは嘴をパカッと開けて驚き、ホタルやテンガはわたわたと慌てる。
【主人の名を忘れるなど、そんなことあり得るのか？】
怪訝な様子のコクヨウに、カイルは低く唸って言う。

「召喚獣契約をしたばかりなら、可能性はなくもないと思います」
「それに、この子はまだ幼いもんね」
主人の名前がわかれば、すぐに誰の召喚獣か判明すると思ったけど。そう簡単にいかないか。
ふむ。忘れちゃったなら、別の方法を取るしかないな。
俺は顎に手を当てて少し考え、それからイヴェルに再度尋ねた。
「ご主人さまってどんな人？　男の人？　女の人？」
ご主人さまの特徴から、人を絞っていこう。
【男のひと。とっても優しいよ。ボク失敗してばかりなんだ。でも、『気にするな』って頭なでて、いっぱいなぐさめてくれるの】
嬉しそうに答えるその様子から、とても可愛がられているのがわかる。
【でも、なでる力が強いから、ボクちょっと目がまわっちゃう時あるんだ】
優しい男の人で力が強いか……。
俺の頭の中に、『ワハハ』と笑いながら、イヴェルの頭を撫でる豪快な人が現れる。
マクベアー先輩が思い浮かんだが、新しく召喚獣契約をしたという話は聞いていない。
「どれくらいの背丈かはわかるか？」
カイルの問いに、イヴェルは頭をちょこんと傾け考える。
【ん～、あなたよりちょっと大きい……かな？】

カイルより大きいってことは、百七十センチくらい？
生徒であれば、三年生か高等部の生徒。そうでなければ、先生か学校に出入りする大人？
とりあえず、初等部の生徒の線は消えたな。
それに有力情報はゲットしたけど、人物を特定するにはまだヒントが足りないなぁ。
「じゃあ、どうやってここまで来たのかは覚えている？　ご主人さまとはこの近くで別れたのかな？　迷子になる前は何をしていた？」
来た方向や何かしらの情報を得ることができれば、それを手がかりにご主人さまを見つけられるかもしれない。
イヴェルは思い出しながら、少しずつ話し始める。
【えっとね。迷子になる前は広い原っぱにいて、ご主人さまがボクを訓練してくれてたの】
ふむふむ、イヴェルの能力訓練かな。
まだ幼いと、能力を上手く使えないことがある。
能力向上や威力の安定、お互いの信頼関係を強めるためにも、契約初期の訓練や遊び、スキンシップはおすすめだ。
原っぱということは、歓迎会を開いた広場かな。この森と寮の間にある場所だ。
いや、東側にも通りに面した広場があるか……。
俺が考え込んでいると、ザクロが興味津々で尋ねる。

【原っぱで訓練して、なんで森で迷子になっているんでぃ】
イヴェルは少しもじもじしながら言う。
【あのね、大きな音がしたの】
「大きな音？　どんな音？」
そんな大きな音、したかなぁ？
俺が首を捻りつつ尋ねると、イヴェルは両前足を大きく広げる。
【ドォーン！　って、とっても大きな音だよ。近くに落ちたの。雷かも！】
短い前足をめいっぱい広げたイヴェルは、めちゃくちゃ可愛かった。
でも、イヴェルは真剣なんだから、ニヤけちゃダメだ。
俺はニヤけそうになる口元を隠し、小さく咳払いした。
「……大きな落雷か」
今日は晴天。晴天でも雷が落ちないわけではないが、近くで雷が落ちたら、離れている俺たちだってさすがに気づく。
召喚獣の能力という可能性もあるが、ビックリするぐらい大きな雷を落とせるのなんてヒスイくらいだろうしなぁ。
イヴェルの説明に、ますます謎が深まるばかりだ。
「それで、その大きな音に驚いたのか？」

カイルの言葉に、イヴェルはしょんぼりしながら頷いた。
【ボク……ビックリして。夢中で走ったの。そしたら……知らない森のなかで。それで、ご主人さまを呼んでたら、ヒヨコさんがそこからのぞいてたの】
イヴェルは板塀の隙間と、コハクを順番に前足で指し示した。
【コハク、まいご見つけた！】
イヴェルの前で仁王立ちしていたコハクは、俺たちに向かって誇らしげに胸を張る。
【なるほど。コハクを見かけて、敷地内に入ってきたんですのね】
ヒスイの言葉に、イヴェルがコクリと頷く。
「事情はわかったよ。つまり、訓練中に大きな音がして驚いて、森の中に逃げてきたってわけだね」
「でも、話を聞いた限りでは、結局どのあたりから来たのかわかりませんでしたね。まぁ、仮に元いた場所がわかっても、主人がこの子の捜索のため、すでに移動しているかもしれませんけど」
難しい顔をするカイルに、イヴェルの目がみるみるうちに潤(うる)んでくる。
カイルがそれに気がつき、顔を引きつらせた時にはもう遅かった。
イヴェルは地面に伏せて「ミュゥウ、ミュゥウ」と大きな声で泣き始める。
あわわわ、泣いてしまった。
俺は小さなイヴェルを抱き上げると、背中をぽんぽんと優しく叩く。

「大丈夫だよ。ちゃんと見つけてあげるから。ね！　カイル」
「は、はい！　フィル様のおっしゃる通り、方法はいくらでもある！」
俺とカイルが言うと、イヴェルは心細げに顔を上げる。
【ほ、ほんとぉ？】
「うん。イヴェルはこの地方では珍しい子だしね。いろんな人に聞いたら、きっと君のご主人さまのことを知っている人が出てくるよ」
そう言って励ますと、イヴェルは「ミュゥ」と小さく鳴く。
まだ不安そうだけれど、少しは気持ちが落ち着いたみたいだ。
「フィル様。雪豹を保護したことを、中等部の寮生に知らせてみませんか。この森は中等部の裏手にありますし、まずは主人が中等部関係者かどうか確認してみては？」
「そうだね。そうしよう」
カイルの提案に俺は微笑み、それからヒスイを見上げた。
「ヒスイ、お願いがあるんだけど。僕たちはこの子のご主人さまを探しながら寮に戻るから、ヒスイも上から見てそれらしい人がいたら教えてくれない？」
【わかりましたわ。もしかしたら、そのご主人さま自身が捜索するため、こちらに来ている可能性もありますものね。見つけ次第お知らせしますわ】
ヒスイはにっこり笑って、ふわりと空に浮かび上がり姿を消す。

よし、これで行き違いになることもないだろう。
「皆、寮に移動するよ」
俺がイヴェルを抱いたまま胸ポケットにコハクとルリを入れると、カイルがホタルとザクロを抱える。コクヨウとランドウとテンガには歩いてついてきてもらって、寮に戻ることにした。
俺とカイルは歩きながら、キョロキョロとあたりを見回す。
う～ん、それらしい人影もないし、イヴェルを探している声も聞こえないなぁ。
そのご主人さまも、小さいイヴェルがまさかこんな森の奥深くまで来ていると思っていないのかもしれない。
ご主人さまも心配しているだろうから、早くイヴェルの無事を教えてあげたいな。
腕の中のイヴェルを見下ろすと、胸ポケットのコハクやルリと一緒に遊んでいた。
『どっちがポケットから頭を出すでしょーかっ！』というゲームみたいだ。
ルリかコハクのどちらかが頭を出すのと同じタイミングで、イヴェルが名前を呼び、当たるかどうかという遊びらしい。
……さっきからポケットが、やけにガサガサするなぁって思ってたんだよね。
まぁ、迷子になって落ち込んでいたイヴェルの気持ちが、向上したのはいいけど。
正解するたびに、イヴェルは小さな足をジタバタさせて喜んでいた。
雪豹の子供って、足が少し短めで、体型がコロコロしていて可愛いなぁ。

それにホタルたちとは、また違ったもふもふ感。
短毛なんだけど、寒い地域に棲む動物だからか、ぎゅっと毛が詰まっていてボリュームたっぷりだ。
こんなに小さくて可愛いのに、成獣になれば成人男性より大きくなるんだよね。
このもふもふも今だけの限定かと思うと、より特別な気がする。
無邪気に遊んでいるイヴェルたちに顔を綻ばせていると、ふいに空中にヒスイが現れた。
【フィル、ここから少し東寄りに進んでください。十数人の生徒たちがイヴェルを探しております。もしかしたらその中の誰かが、その子の主人かもしれませんわ】
その言葉に、イヴェルの目が輝く。
「ありがとうヒスイ。カイル、行ってみよう！」
「はい！」
俺たちはヒスイの案内で、その生徒たちのいる方向へと駆け出した。
到着すると、高等部の生徒が数人散らばってイヴェルの名前を呼んでいた。
「え……先輩？」
そこにいたのは、去年卒業したジェイ・ハリス先輩やティム・ミラー先輩たちだった。
一年の時、商学のお菓子をよく買いに来てくれた先輩たちである。
ハリス先輩は俺たちに気がつくと、満面の笑みで挨拶をする。

「やあやあやあ！　テイラとグラバー！　どうしたんだ、こんなところで！」
久々に会ったけど、勢いの激しさと熱血っぽさはまったく変わらない。
声の大きさとその勢いにちょっと圧倒されながら、俺は答える。
「えっと、雪豹の子供を保護しまして」
「皆さんの中に、この雪豹と契約されている方はいませんか？」
俺に続いてカイルが尋ねると、ハリス先輩はようやく俺が抱く雪豹に気がついたようだ。
「ゆ、雪豹だ！　皆、いたぞー！」
大きな声で叫ぶと、散らばっていた先輩たちがゾロゾロと集まってきた。
……やっぱりお菓子を買いに来てくれた先輩方ばかりだ。
「おお！　イヴェルが見つかったのか。良かった、良かった。なぁ、ディーン」
マクベアー先輩が快活に笑いながら、ディーンとともにやって来る。
え？　誰がイヴェルのご主人さま⁉
俺が動揺して先輩方を見回していると、イヴェルが嬉しそうな声で言った。
【そうだ！　ご主人さまのお名前、ディーンさまだ！】
え、ディーン⁉
目をパチクリとさせる俺の腕の中で、イヴェルは「ミュウミュウ」と鳴きながら、ディーンに向かって両前足を伸ばす。

【ご主人さま、会えてよかったぁぁぁ！】
元気に鳴くイヴェルに、ディーンは安堵した顔で近づいてきた。
それから、じたばたともがくイヴェルを俺から受け取り、そっと腕に抱え込む。
【ご主人さま、もう会えないかと思ったよ】
「探したぞ。怪我はしていないか」
ディーンはよく見るためか、イヴェルを持ち上げ体勢を変えようとする。
だが、イヴェルは離されると勘違いしたのだろう。
【やだやだ】
もう絶対に離れないといった様子で、ディーンの腕にしがみついた。
イヴェルも加減しているのだろうが、子供とはいえ雪豹の爪だ。
鍛錬で日に焼けたディーンの肌に、赤いひっかき傷を作る。
微かに眉を顰めたディーンは、ため息を吐いた。
「まったく……」
呆れ気味に笑って、イヴェルの小さい頭を撫でる。イヴェルは嬉しそうに、その手に頭をすりつけた。
イヴェルにご主人さまの特徴を聞いた時、とても優しい人だって言っていたけど……。
確かにイヴェルのこと、すごく大切にしているようだ。イヴェルも幸せそう。

俺たちはそんな彼らを見て、自然と笑顔になった。
強面の人が子供の雪豹を可愛がってる姿って、ギャップがあってなんだかほんわかするよね。
すると、ディーンは俺たちの視線に気がついたのか、眉間にしわを寄せる。
一見不機嫌そうではあるが、これが照れ隠しであることはわかっている。
だって、うっすら耳が赤くなっているもんね。
俺はディーンに向かって、にっこり笑った。
「ディーンさんがご主人さまだったんですね。見つかって良かったです」
「保護した時にフィル様が怪我がないか確認されていましたので、安心してください」
続いてカイルが言うと、ディーンは安堵の息を吐く。それから、俺たちに向かって頭を下げた。
「イヴェルが世話になったな。感謝する」
そんなディーンに、カイルと俺は恐縮する。
「頭を上げてください。俺たちはただ迷子を保護しただけなんで……」
「コハクがたまたま発見したんです。でなかったら、僕たちも気がつかなかったかもしれません」
コハクが胸ポケットから顔を出し、フンスと鼻息を吐く。
【コハク、見つけた！】
得意げなコハクを見て、ディーンは微かに笑った。
「そうか。ありがとうな」

【ヒヨコさん、ありがと！　皆もありがと！】
イヴェルも俺たちに向かって、お礼を言う。
「でも、本当に良かったなぁ」
「ああ、日が暮れても見つからなかったらどうしようかと思っていたもんなぁ」
「そうだな。テイラたちが保護してくれて本当に助かった」
ハリス先輩たちは安心したと、胸に手を当てて息を吐く。
「どのあたりで発見したんだ？」
マクベアー先輩の問いに、カイルが答える。
「小屋の鍛錬場付近の塀の傍です」
「あぁ、小屋まで行っていたのか。それじゃ、探しても見つからないはずだ。俺たちが重点的に捜索していたのは、東の広場付近の森だからな」
マクベアー先輩はそう言って、東側を指さす。
やっぱりイヴェルが訓練していたのは東の広場か。
先輩たちが東側で捜索していると知って、もしかしてとは思ったんだよね。
しかし、候補地ではあったけど、そこから小屋までって寮側の広場と比べると距離が倍はあるよな。こんなに小さな体で、それだけ移動してきたのか。雪豹ってすごいんだな。
俺が感心していると、突然コハクがポケットの中で翼をバタつかせた。

「ん？　どうしたの？」
【カルロス！】
コハクに言われて視線を向けると、そこには木の幹から半分だけ顔を出し、ジッとこちらを見つめる三日月熊（みかづきくま）の姿があった。
マクベアー先輩の召喚獣、三日月熊のカルロスである。
びっくりした。動かないから、全然気づかなかった。
【カルロス～！　カルロス～！】
コハクが嬉しそうに呼びかけるが、カルロスはスッと木の陰に隠れた。
【カルロスーッ!?】
挨拶を返されなかったコハクは、ショックを受ける。
本当に、いったいどうしたんだろう。
コハクとカルロスは召喚獣仲間の中でも、とても仲良し。
マクベアー先輩が卒業して会う回数が減ってからは、会うたびに感動の再会かってくらいの挨拶を交わしている。
それを知っているザクロやテンガも、不思議そうな顔をした。
【カルロスはどうしたんでぃ】
【ケンカしたっすか？】

コハクはカルロスが隠れている木を見つめ、悲しげに首を横に振る。
いつもと様子は違うけど、別に怒っている感じじゃないよね。むしろ落ち込んでいる感じ？
俺は隠れたままのカルロスを指さして、マクベアー先輩に尋ねる。
「あの、マクベアー先輩。カルロスが隠れたままこっちに来ないんですけど、何かありました？」
マクベアー先輩はカルロスを振り返って、困り顔で笑う。
「あぁ、実は広場でイヴェルの能力訓練をやっていた時、横でカルロスも訓練をしていたんだが……。その件で落ち込んでいるみたいでな」
カルロスの訓練で失敗でもしたんだろうか。
三日月熊は土属性の能力を持っている。
戦うため自分の拳（こぶし）の表面を砂で固め、頑丈な岩のグローブを作ったり、土や砂で造形物を作ることができるんだけど……。
「何の訓練をしていたんですか？　失敗でもしたんですか？」
カイルが聞くと、マクベアー先輩はちらっとイヴェルに視線を向ける。
「まぁ、失敗といえば、失敗だな」
渋い顔で口ごもるマクベアー先輩の代わりに、ミラー先輩やクリフ・エイデン先輩が説明する。
「カルロスの土の能力を使って、土製の雪窯（ゆきがま）を作ろうと思ったんだ」
「去年、テイラたちと一緒に大きいのを作っただろう？　野営の時に便利そうだからって、二、三

人用のものが作れないか試していたんだよ」
雪窯とは、一人用の小さな雪のかまくらのことである。冬場の狩りで、休憩したりする時に使用するものだ。
去年雪が積もった時、大人六人くらいが入れるほどの、大きなかまくらを作ったんだよね。
そのかまくらを、カルロスの土の能力で作ろうと思ったわけか。
「上手く作れなかったんですか？」
俺が首を傾げると、マクベアー先輩はさらに渋い顔になる。
「できたはできたんだけどな。上手くできたことに喜んだカルロスが、屋根に上ってしまって……。天井が抜けて、落っこちたんだ」
「え！　カルロスに怪我はなかったんですか？」
元気がないのも、もしかして怪我をしているのが原因とか？
慌てる俺に、マクベアー先輩は笑って軽く手を横に振る。
「三日月熊は多少の高さから落ちても、怪我しないんだ。体が柔らかいし、毛もふわふわしているからそれがクッションになるらしい」
俺はホッと胸を撫で下ろす。
「そうですか。それなら良かったです。じゃあ、カルロスの元気がないのは、失敗したのが原因ですか？　それとも、作ったものが壊れちゃったからとか？」

小首を傾げる俺に、マクベアー先輩はため息を吐いた。
「落ちた時の音が原因だ」
「落ちた時の音？」
「そう。あたりに地響きがするくらい、大きな音を立てて落ちたんだよ。ドーーーン！　って」
エイデン先輩が大きく手を広げて、その音の大きさを表現する。
そのジェスチャーに、俺たちは見覚えがあった。
「あ、もしかして、イヴェルが迷子になったのって、その音にビックリして……とかですか？」
俺が顔を窺いつつ尋ねると、ディーンや先輩たちはコックリと頷いた。
「音と同時にイヴェルが走り出した」
ディーンがイヴェルを見て言い、マクベアー先輩が頭を掻く。
「大きな音だったから、イヴェルには怖かったんだろうな」
なるほど。イヴェルが驚いた音は、雷じゃなくてカルロスが落ちた音だったのか。
それでイヴェルが迷子になり、カルロスが責任を感じちゃったわけだな。
いろいろと謎が解けた。
【頑丈だったから、まさか壊れるなんて思わなくて……。驚かせるつもりじゃなかったんだよ】
しょんぼり頭を下げながら、カルロスが木の陰から出てきてこちらにやって来る。
【イヴェル、驚かせてごめんねぇ】

カルロスは申し訳なさそうに、イヴェルに謝る。
しかし、当のイヴェルはディーンと再会した安堵からか、すっかりおやすみモードに入っていた。
【ん～いいよぉ】
重くなる目蓋と戦いながら、前足を挙げて返事をする。
これ絶対に、謝罪の理由がわかってないな。
まぁ、今回は事故のようなものだし、驚かせたことは許してもらえたってことだろうか。
カルロスはまだ少し落ち込んでいるみたいだけど……。
すると、コハクが胸ポケットから出て、スルスルと俺の腕を伝い降り、近くにいたカルロスの頭に飛び移った。それから、カルロスの頭をヨシヨシと撫でる。
落ち込んだ友だちを慰めてあげているのか。
熊を慰めるヒヨコの光景って、不思議だけどなんだか微笑ましい。
俺はくすっと笑って、それからマクベアー先輩たちに向かって言う。
「そろそろ寮に戻りますか？　イヴェルも疲れて眠そうですし」
マクベアー先輩はうつらうつらと船をこいでいるイヴェルを見て頷いた。
「そうだな。今日はずいぶん頑張ったし、迷子になって疲れただろう」
「広場に荷物など残っていなければ、ディーンさん、僕たちと一緒に戻りますか？」
「ああ」

マクベアー先輩たちは高等部寮だが、ディーンは中等部寮に滞在している。
高等部寮には東側へ抜けたほうが早いので、マクベアー先輩やハリス先輩たちとはここでお別れだろう。
そう思っていたら、ハリス先輩がポンと胸を叩いた。
「俺たちが中等部まで送ろう！」
その申し出に、俺とカイルが目を瞬かせる。
「あ、大丈夫ですよ。高等部も門限あるでしょうし」
「ええ、この森はよく知っていますから」
高等部の寮はここから離れているから、寄っていたら戻るのが遅くなってしまう。
「走って帰れば充分間に合う。久しぶりに会えたから、テイラたちと話をしたいんだ」
そう言うハリス先輩に、他の先輩方も「俺たちも話したい」と手を挙げる。
まぁ、確かに。マクベアー先輩は交流会の時、一緒に案内係を務めたからたびたびこちらに来て話をしていたが、ハリス先輩たちとは卒業してからすれ違う程度だったし……。
全員の手が挙がったのを見て、マクベアー先輩は豪快に笑った。
「わはははは。そうか！　じゃあ、皆で送ろう。ただし、気合を入れて帰るぞ」
「ええ！　任せてください。商学の屋台のために、毎日走り込みしてるんで！」
ハリス先輩が言い、エイデン先輩が皆に向かって聞く。

「走って帰るなんて、その訓練に比べたら大したことないよなぁ、皆！」
「「おぉぉ！」」
勝鬨（かちどき）のような威勢のいい声に、マクベアー先輩は再び笑った。
ここまで張り切られたら、お願いするしかないよね。
「ありがとうございます。よろしくお願いします」
俺は笑って、カイルと一緒にぺこりと頭を下げた。

寮への帰路、ミラー先輩はさっそくとばかりに、メモ帳を取り出した。
「今度の商学の屋台、テイラたちは何を出すんだ？　招待客に出したという、ポップコーンや綿あめという食べ物か？」
中等部のことなのによく知ってるな。マクベアー先輩やディーンから情報を仕入れたんだろうか。
「そうですね。一応、候補に挙がっています」
ドルガドとティリアの招待客たちに大好評だったポップコーンと綿あめ。
彼らの喜びようを目にしたライラは今、『たくさん売るわよぉ！』と商売魂に火がついている。
ただ、ライラが推している綿あめは、作り置きには向かないんだよね。
二年生は班の人数が増えるため、作業できる人数も多くなるが、それでも販売個数は限られるだろう。

綿あめを出すなら、作り置きが可能な商品も用意したほうがいいのかな。
いや、それだったら、ポップコーンに絞ったほうがいいだろうか。
ポップコーンも出来立てが一番美味しいが、綿あめと違い一度にできる個数が多い。味のバリエーションも豊富だから、どんな人にも喜ばれるだろう。
「ちなみに、皆さんはどっちが食べたいですか？」
俺が尋ねると、ハリス先輩たちは眉間にしわを寄せて、真剣に考え込む。
「どっち……どっちか……。難しい質問だな」
「俺はポップコーンがいいな。いろいろ味があるらしいし」
「俺は綿あめを希望する！」
「俺も！　マクベアーさんに聞いても、どうしてもふわふわのあめなんて信じられなくてさ」
「だけど、ポップコーンも相当美味いらしいぞ！」
「うわぁ、悩む。正直言えば、どっちも食べたい！」
ワイワイと盛り上がる先輩たちに、俺はくすくすと笑う。
「参考にさせていただきます」
「参考になったなら良かった。楽しみだなぁ、皆！」
ハリス先輩が皆に向かって言うと、エイデン先輩がグッと拳を上げる。
「ああ！　今年も死ぬ気で走るぞ！」

熱く決意するハリス先輩たちに、ディーンは呆気にとられていた。
「皆……そんなに屋台料理が好きなんだな」
その言葉を聞いて、ハリス先輩たちは大きく首を振る。
「いいえ！　俺たちが何よりも好きなものはテイラの料理ですよ！」
「テイラの料理をこよなく愛しているので、同志を集い、会も作りました！」
「その名も『フィル・テイラ料理愛好会』!!」
そう言って、戦隊モノのヒーローよろしく、先輩たちは思い思いにポーズを決める。
「フィル・テイラ……料理愛好会？」
ディーンが俺に視線を向けるのと同時に、俺はそっと顔をそむけた。
俺が作ったわけではないです。
「ディーンさんも入りたかったらどうぞ！　会員募集中です！」
「え!?」
珍しく動揺するディーンに、ハリス先輩たちは白い歯を見せてニコッと笑った。
「他国にいては、なかなかテイラの料理を食べることはできないでしょうが、会員になったら過去の会報も含めて送ります」
ミラー先輩がメガネをかけ直し、不敵に微笑む。
「か、会報まで作ってるんですか？」

初めて聞いたんですけど……。
驚く俺の耳元に、カイルがヒソヒソと囁く。
「一部生徒の間で、話題になっている会報らしいです。レイが言っていました」
「話題になる会報って、いったいどんな内容なの……」
すると、ちょうどミラー先輩が、ディーンに会報について説明を始めた。
「会報ではテイラの料理に関する考察と、愛好会の活動内容が記されています。また、新作が出た際には、料理の詳細を絵つきで解説。食べた感想やそれを手に入れるための苦労も載せています」
「苦労の先に感動あり！　卒業生送別会の会報は、何度読んでも泣ける内容です！」
グッと拳を握って言ったエイデン先輩は、すでに涙ぐんでいた。その周りにいる先輩たちも、深く頷いている。
熱く語られるフィル・テイラ料理愛好会の話を聞きながら、俺は呆然とする。
料理を好きになってくれるのはありがたいが、まさかそこまでとは……。
「フィル様、このままディーンさんが愛好会に入ったら、とんでもないことになるんじゃないでしょうか」
表情を強ばらせて囁くカイルに、俺は目を瞬かせる。
「と、とんでもないことって？」
「ディーンさんが会員になれば、マッテオさんやルディさんだけでなく、ドルガドの生徒たちにも

拡散されます。さらに、ルディさんと仲の良いリンさんに伝われば、今度はティリアの生徒たちにも……」

ゴクリと喉を鳴らすカイルに、俺は口元を引きつらせる。

「いや、まさかディーンさんは大丈夫だよ……」

食べることが好きなマッテオやリンなら可能性はなくもないが、ディーンはお菓子が大好きって人じゃない。だから、ハリス先輩たちの情熱は凄まじくとも、ディーンならば嫌なら嫌とハッキリ断ってくれるだろう。

俺は笑って、チラッとディーンに視線を向ける。

「今までにそんな壮絶な戦いがあったのか……」

先ほどまで勧誘に引いていたディーンが、エイデン先輩たちの語る苦労話に、興味を持ち始めていた。お菓子というより、過去のお菓子争奪戦の歴史に心惹かれてしまったらしい。

「……早く別の話題に変えましょう」

「そうだね」

深刻な顔で言うカイルに、俺はコクリと頷いた。

ディーンが勧誘される前に、話題を変えなくては。

そう思って視線を動かした俺は、ハリス先輩の腰に下げている袋がもぞもぞと動いているのに目が留まる。

立ち読みサンプルはここまで

気のせい？　いや、間違いなくもぞもぞ動いている。

「あ、あの……ハリス先輩。袋が動いているんですけど……」

俺の指摘にハリス先輩は驚いた様子もなく、「ああ、起きたのかな」と言って袋を開ける。

ぴょこんと中から出てきたのは、頭の毛先が水色で、それ以外は白い体毛の小猿だった。

バスティ猿という、北にあるバスティニア国に棲む猿だ。

確か頭の毛色が濃い水色だと雄、薄い水色だと雌なんだっけ。ということは、男の子か。

「俺の召喚獣のトトだ。この袋で寝るのが好きでな。トト、皆に挨拶できるか？」

ハリス先輩が袋から出そうとすると、トトはその手をすり抜け主人の頭の上に乗る。

それから、俺たちに向かって、大きな声で挨拶をした。

【こんにちはーっ!!】

その声に驚いたテンガが跳び上がり、すやすやと眠っていたイヴェルの目がぱっちりと開く。

小さい体ながら、ずいぶんと元気のいい子だ。

俺やカイル、呆気にとられるテンガたちを見回し、トトは自己紹介を始める。

【心に熱い情熱と太陽を！　元気印のトトです！】

キャッチフレーズとともに、トトはポーズを決める。

デジャヴ……。このポーズ、さっきハリス先輩がしていたぞ。

熱血な主人には、熱血な性格の召喚獣なのか。